

妊孕性温存を目的としたがん患者の医療連携の重要性

ー卵子凍結目的で受診された患者の 1 例を通してー

医療法人三慧会 IVF なんばクリニック ○湯浅 美紀

I. 緒言

近年、がん治療に対する医療技術の向上によって、多くの患者ががんを克服できるようになってきた。がん患者が妊孕性温存治療をする場合、がん治療と並行して施行するため、原疾患を視野に入れながら円滑な採卵・卵子凍結が求められる。当院ではがん治療病院と連携をとり、妊孕性温存治療を必要とするがん患者の受け入れ体制が確立されたので本事例を通して報告する。倫理的配慮として、個人が特定されないように配慮した。

II. 実践内容

がん治療病院と合同カンファレンスを開催し、両施設間で情報提供用のパンフレットの検討、情報交換をおこなった。その後、血液疾患で 30 歳代前半未婚女性が、がん治療医から妊孕性温存の情報提供を受け、がん治療前に卵子凍結目的にて当院紹介受診となる。生殖専門医から情報提供を受け、すぐに自己決定し月経周期の調整を行なった後、卵巣刺激を開始した。卵子凍結までの必要な情報提供をおこない、急遽、事前準備と手順を作成した。当院通院中随時、医師間で直接電話にて状況報告・情報交換をおこなった。

III. 結果

事前にごがん治療専門医より患者へ情報提供があったことで、迅速に自己決定でき採卵スケジュールを進める事ができた。その後も両施設の専門医が密に連携をとり、採卵前日よりがん治療病院で血小板輸血を施行、採卵中・採卵後ともに経過は良好で、MII 卵子 6 個の凍結ができた。

IV. 考察

がん患者は原疾患の受容が困難な中で妊孕性温存について短期間で自己決定しなければならないことが多い。限られた時間の中で、いかに患者に正確な情報を伝え、がん治療医と生殖医療医の密な連携をとるかが重要である。本症例では、患者に対して事前にごがん治療医から妊孕性温存についての情報提供があり、原疾患を視野に入れながら両施設間で連携をとり、問題なく卵子凍結ができた。しかし、本症例のように月経の調整や治療の受け入れなどスムーズにいかない場合も考えられる。がん患者の妊孕性温存を検討する上で貴重な症例と思われた。

V. その後の取り組みと今後の課題

本症例後、両施設間でパンフレット作成と初診から配偶子凍結までの手順をマニュアル化した。患者が事前に情報収集できるように、パンフレットを当院のホームページからダウンロード可能なシステムを作った。がん患者が原疾患の治療を最優先しながら妊孕性温存治療について自己選択でき、本症例以降のがん患者の受け入れがスムーズとなった。今後は、医師間の連携だけでなく、看護師や心理士と連携をとり、メンタルサポートシステムの構築していくことや、またがん治療前のみならず、がん治療が終わった後の不妊治療のフォローアップについて対応できるシステムを検討していかなければならないと考える。